

発達障害のある子どもへの歯科における配慮と対応

大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部

村上旬平

発達障害のある子どもたちは、定型発達の子どもたちよりも感覚や認知の凸凹が際立っています。そのため定型発達者を想定して作られた社会システムを利用するときには、壁（バリア）にぶつかってしまうことがあります。歯科診療室にも壁がたくさん存在します。特に感覚過敏にまつわる問題は大きく、歯科診療室の音や匂い、歯科材料の味や注水器具の音や水などの刺激は、耐えがたい感覚として彼らの歯科治療への不安を増大させることがあります。さらに感覚や情報の処理がうまくいかず、想像することの困難さのある子どもたちでは、歯科医療者とのコミュニケーションがうまくいきません。このことはさらに不安や恐怖を増大させ、パニックを誘発してしまう危険をはらんでいます。また体性感覚の不安定さや衝動性、多動によって、治療中に落ち着かず動いてしまう子どももいます。

発達障害のある子どもたちを歯科に迎え入れるときには、彼らを歯科環境に合うようトレーニングするだけでは限界があるため、歯科の環境を彼らに合わせ、安心できるものにする必要があります。環境設定では、それぞれの特性に応じ、音や光の調節や予約の調整、治療に使う器具やデバイスの選択をします。視覚的な支援やほめる対応は特に有効です。それぞれの子どもの特性を知るには、問診と観察に加え、発達検査の結果や児童精神科や小児科などの専門家からの情報を参照するとよいでしょう。子どもたちに接するときには、情報をもとに目の前にいる子どもの感覚世界を「想像」しながらすすめるべきだと考えています。その子どもにとって耐えられないような刺激を与え続けてしまうと、長期にわたり歯科受診や日常生活に影響が及ぶ危険性があります。そのためそれぞれの子どもの限界を見極めることが、とても大切です。ときに高次医療機関と連携し薬物を用いた行動調整を行ったり、主治医や福祉、教育関係者らと連携して歯科保健をすすめたりしたほうがよい場合もあります。

発達障害のある子どもたちの親御さんの中には、心身が疲れてしまっていたり、将来に不安を抱えていたりする人がいます。それに対し歯科医療現場から家族支援を行うこともあります。今回のお話では、発達障害のある子どもたちがよりよい歯科医療体験を得られるよう、発達障害のある子どもたちの歯科での配慮や対応の方法や、他職種との連携や家族支援についてお話できればと思います。

村上 旬平
Murakami Jumpei



【学歴】

1998 年 大阪大学歯学部卒業
大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部入局
大阪大学大学院歯学研究科入学
2002 年 大阪大学大学院修了（博士（歯学）取得）

【職歴、その他】

2002 年 大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部医員
2003 年 大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部助手
2007 年 大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部助教
2016 年 大阪大学歯学部附属病院障害者歯科治療部講師（現在に至る）
2018 年 コペンハーゲン大学客員研究員
2021 年 大阪大学歯学部附属病院病院准教授（現在に至る）

【学会資格】

2003 年 日本障害者歯科学会認定医
2009 年 日本障害者歯科学会認定医指導医
2018 年 日本障害者歯科学会専門医
2018 年 日本障害者歯科学会専門医指導医